① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月26日)

山と博物館

第8巻 第11号 1963年12月25日 大町山岳博物館

アオジ

12月に入ると、晴天の日はあっても夜になると冷え込みが強く、翌朝は必ず真白に霜が降りている。そんな朝には霧の時が多く、時には午前中も霧が晴れず、寒い朝が続く。そのような霧の林を歩くことは何かしらヒロイックな気持になれて好きだった私は、幼い時から霧の朝にはよく近くの林に出掛ては、冬鳥の姿を見、霜を踏んで歩いたものだ。

その頃は、私の家の近くにも原野が沢山あり、初冬の林はカシラダカの大群やホホジロの一家族がいて、それ等の小鳥達の姿を飽かず眺めたものだった。ある年、その林の一劃が切り払われて跡がススキと潅木の原になった。その年の秋、霧の深かった朝この原を歩いていたら例年のカシラダカやホホジロの群と違う腹の黄色の良く目立つアオジの一群を見つけ、大喜びで、次の日もその次の日も、一週間ほど欠かさず毎朝見に行って、鳴き声はカシラダカより濁ったチッ、チッの一声区切りであること、群っている時は人が近ずいても、一度にパッと上空に舞い上らず数から数を潜って、少さく鳴き交すこと等細くメモし生態を観察した。

その後三年位は、この原に秋になると一群のアオジが訪れ一週間程帯在しては南に飛び去って行った。秋にはこのアオジの群を見るのを一つの楽しみにしていたのだが、近年都市の発達と共に山林は切り払われて昔の姿は跡絶、原野は開拓されて田畑となり、又家屋が建ち並び、野鳥の楽園は年々少なくなってその数も著しく減少し、容易に彼等の生態を観察することができなくなってしまったことは誠に残念である。

長沢　修介

志賀高原の池

和田　清

私は今、一ぺんの昔話を読みおえました。それは、今から四、五百年昔のことです。

志賀高原のふもと、中野の里の小城館のとのさまに、一人の姫君がありました。名を黒姫と呼び、近郷から美しいお姫さまとうわさされていたほどです。

ある日、りっぱな若侍がこの城にやって来て、「ぜひ姫をよめにもらいたい。」とたのみましたが、とのさまは受けつけません。若侍は二度、三度と城へやって来てはたのみますが、とのさまはなかなか、へんじをしませんそこで、若侍はついに

「わしは、大沼池にすむへびで、池の主です。美しい姫がほしくて、侍に化けてやって来たのです。」と身をあかしました。

とのさまは、池の主と聞いて、〃なおさらそんなとこへは姫はやれない〃と思いましたが、ここでことわれば、どんなにたたりがあるかわからない、それではと、「この城のまわりを二十一ぺんまわったら姫をやろう。」と、やくそくしました。

やくそくの日までに、とのさまは城のまわりへ、鉄のかきねをはりめぐらし、ところどころへは刀までつけておきました。

さて、へびは山奥の大沼から中野へ、きょうこそは姫をもらって行こうとばかり、乗りこんで来たのです。しかし、来て見ると、城のまわりはへびのきらいな鉄ばかり、おまけに刀までついていたのです。それでもへびは姫をもらいたいばかりに、まわり始めました一かい。二かい。だんだんとへびの全身がきずつき、血が流れ出して来ました。苦しさにうなり、のたうちまわりながらもまわり続けたのです。そのぶきみなうなり声が、山々にこだまし、はげしい雨と風にかわって、城をおそいました。

しばらくして、とのさまはへびは死んだものと思い、姫をやらなくてよかったと安心していると、夜明けごろ、ようやく息をふきかえしたへびは『これは、だまされた』といかり、山に帰って、ほかの池の主とそうだんして、一度に池の水をはらいました。

そのために山は七日七晩も大あれにあれ、ふもとの村々はすっかり水びたしになってしまいました。さいわい城は、小高い所にあったので、何ともありませんでしたが、姫はこのようすを見て、『これは、わたしのせい』と、ある晩、こっそり近くの山にのぼり、その池に身をなげてしまいました。

それから、この山を黒姫山と呼ぶようになったということです。今でも、中野では、七月のぎおん祭りには、黒姫山の方から黒雲がわいて雨が降るといわれ、この雨を見ながら村の人々は、「黒姫さまがおいでになった。」と、いっているそうです。

いったい、ふもとの村には、志賀高原の池についての昔話が、いくつかあるようです。

この大沼池にえん堤をきずいた吉田老人にまつわる話、びわ法師が、村人をすくうために、身をなげだしたびわ池の話など。

これらはどれも、昔から稲を作る大事な水であり、一方、大洪水をひきおこし、ふもとの村々を一なめにしてしまう、恐しい水でもあったのです。

奥深い山の湖に、水を求め、幾多の難渋を重ねて土地を守って来た、ふもとの村にも、この頃は大がかりな工事が行われ、洪水の心配もへりました。また、発電所にまで利用されるようになり、すっかりようすを変えて来たのです。池の主をおこらせまいと、お祭りまでした山奥くの池も、自動車の音で目をさまし、ハイカーのかん高い声で時を知らされる観光地になってしまったのです。

志賀高原は、かつては草津街道として、わずかな旅人と、ふもとの村人が竹取りや、炭をやくために入っていたにすぎない所でした

それが今では、長野、群馬、新潟の三県にまたがる上信越国立公園の中心となり、年間四十万人もの人たちが訪れるようになったのです。

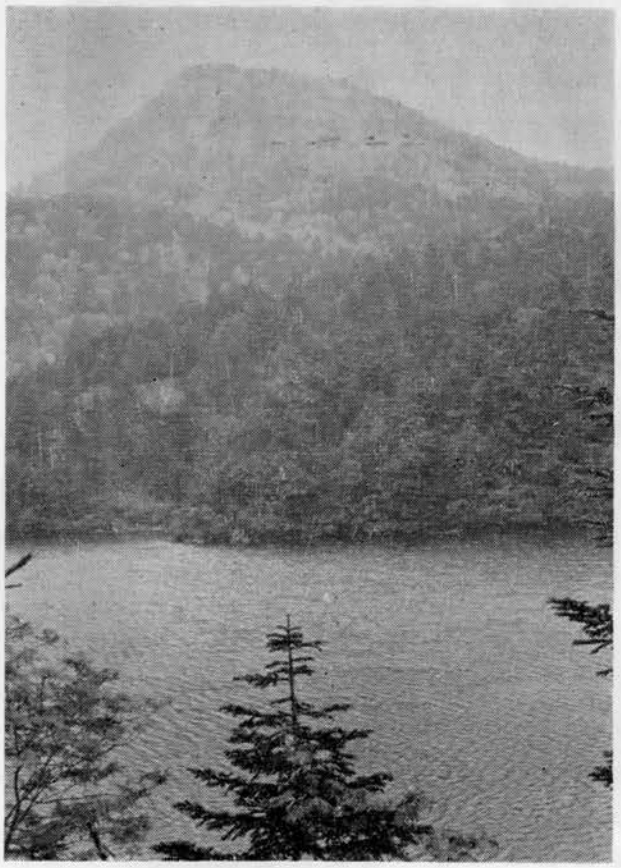
人の力は、あの洪水以上に大自然をかえてしまいました。いたる所にリフトやケーブルが作られ、スキー場になり、キャンプ地になり、どこへ行ってもこみの山にぶつかるようになってしまったのです。

コメツガやオオシラビソのうっそうと茂る森の中に、点々と青白く光る池も、何かいかりにもえて、今にもばく発しそうなぶきみさに暮れています。

どれほどたっても、ふもとの人々にとっては大じな生活の水にはかわりありません。

山奥の池だけは、このままそっとしておいてやりたい。

雪がとけたら、だれも来ないうちに、もう一度あのいくつかの池を訪れてみたいと思います。



【写真は大沼池】

（信州大学志賀高原生物研究所）

針ノ木岳とポリーさん

平林国男

過ぎ去った一年の間には新らしく面識を持った大勢の人がいる。そしてその中にはもう再び顔を合わすことが無いと思われるまた数多くの人々がある。

私などは職業柄初めての人と面識をうる機会は山を仲介とした場合が多い。イタリアのE・ポリー博士もその一人であろう。

E・ポリー博士は、今年の夏日本自然保護協会の針ノ木岳周辺国有林野学術調査の植物班として特別参加した。カタニア大学で助教授をしている女性である。

この時の一行は横浜国大の宮脇昭博士と信大志賀生物研究所の和田清先生を含めた計四名のパーティであった。

大町を出発した私どもは、調査をしながら歩を進め、大沢小屋を過ぎて針ノ木雪渓の尻で雪の山を眺めながら昼食をとった。ポリーさんは彼女のふるさとであるヨーロッパ、アルプスの山と良く似た景色だと、はなはだご気嫌であった。しかしあたり一面に散在する紙屑や食べちらした残飯と空缶の山にはいささか驚いた様子だった。

ところで習慣の違いは恐ろしいもので、彼女はもっぱらパン食、私どももおつき合いのつもりでパン食で通すことにして大量のパンを持ち上げた。

針ノ木小屋に泊った初日はどうやら良かったのであるが、二日目からは三食のうち一回は飯と味噌汁を食わないと落着かない。結局私ども三人は昼食をパンにしてあとの二食は交替で彼女につき合うことに決めた。

調理係は彼女の仕事であり、我々からあらかじめ聞いた望みの量や材料でサンドイッチを作る。とにかくその場で作った食物はその場で処理しないと気がすまず、また食べ残したり捨てたりするのは好まないらしい。もう本当に沢山だと云うまで次ぎ次ぎと勧められるのには閉口した。

山小屋の混雑ぶりには彼女も困惑した様子であった。一畳へ四人メザシで寝る話はあらかじめ宮脇先生から伝えられていたが、寝袋に入った彼女はなかなか寝つかれないらしい。

彼女の希望で用意した睡眠薬＝と云っても今年の春の雷鳥調査で種池小屋にとじこもった際我々の使った睡眠薬の残りであるが＝を提供した。

翌朝薬の効果を尋ねたところ全然だめだったとの返事である。我々が使った時は効果があったからきかない筈はないと云ったまでは良かったが、考えて見ると我々にきいたのは睡眠薬そのものであったのかアルコールがきいたのか全く不明であるからおぼつかない。

こうして針ノ木小屋で一泊した私どもは翌日針ノ木岳から種池小屋まで縦走した。途中要所々々で調査しながら種池に向う。

針ノ木岳の急な岩場をスバリ岳に向って下る時、どこかの山岳部らしい十数名のパーティとすれ違った。

この一行長い日程を経てきたらしく全員疲労の色が濃かった。特にその中の一人は全くくたびれ果てた青い顔色でよろ／＼しながら歩いてくる。突然我々の前でガクンと膝を折って倒れた。するとリーダー大声で一カツして再び立ち上らせそのまま歩かせる。

色とりどりの花をつけている高山植物や周囲の美しい景色は余程彼女の気に入ったらしい二台のカメラを使って盛んにシャッターを切り、教材に使いながら日本アルプスを紹介するのだと張切っていた。

スバリ岳に咲いていたコマクサの花には特に強い関心を持った様子である。もっともヨーロッパアルプスにはコマクサは無いからよけい興味をひいたものと思われるが、とにかく花のそばをなかなか離れがたい様子であった。コマクサは日本では高山植物のシンボルの様に一般の人に良く知られ愛されている花だと説明したところ、ヨーロッパアルプスのエーデルワイスの話が持ち出された。そして話はエーデルワイスとコマクサの美しさの問題にまで発展した。どうも主観の入るめんどうな問題であるが、とにかく私はコマクサが上だと主張し、彼女は絶対にエーデルワイスだと云い張って譲らない。最後に彼女は今まで私の聞いたことのないエーデルワイスを讃える歌を唱って応戦した。残念ながらコマクサを讃える歌が無かったため、この勝負はどうも私の負けになってしまった。

とにかくコマクサは別問題としても彼女は自分の国に深い愛情とプライドを持って堂々とそれを主張する。私も負けてはならじと熱心に写真を撮っている彼女に対し、日本アルプスは私の庭としてこよなく愛し親しんでいるのだと云ってやった。彼女は少し考えている様子であったがその気持はわかる様な気がすると述懐した。どうやらひよんなところで意見の一致を見たらしい。彼女は十月のはじめイタリアへ帰国した。今頃は多分イタリアの山や川そして植物を彼女の庭として愛していることであろう。（山博学芸員）

大黒鉱山物語

唐松岳から祖母谷温泉への途中、クマザサの茂みの中に、赤黒い地肌で草木も育たない大黒鉱山跡がある。話は丁度五〇余年前の明治四十一年、近代アルピニズムの黎明期。白馬山麓に中村兼松、松沢菊一郎、嶺村悦治という三人の百姓があった。山好きの三人は白馬岳一帯の鉱脈を調べて歩いていたが、五竜の裏側に素晴しい銅脈を発見し、富山県へ許可だ申請だと喜びの中に飛び廻っていた。

その頃同じ村に松沢教学という、松本近在名代のバクチ打ちがいたが、彼はこの話を聞いて一儲けしようと割り込んで来た。彼は後立山一帯に亘って試堀権をかけたのである。そして共願に持ち込み、係官を抱え込み三人の仲間へ割り込んでしまった。

鉱石の見本は当時の鉱山界の大物為田文五郎親方の目に止り、その頃の日当三十銭という時に権利は一万余円で売られた。親方は早速岩手鷲の巣から職人を連れて引越してき、人夫百六十余人を使って工事は始まり、時ならずも五竜周辺は大変な賑いをみせた。

世が世であり、山の上のことであったから仕事は一斉人の手によらざるを得なかった。鉱石は細かく砕いて炉に入れ、炭火で一週間も焼き続け、さましてはまた数回焼き、バフというフイゴの大型なもので、三人がかりで風を吹きつけ製練を続けたがそれでも、一本八貫匁というピカ／＼する銅の延棒が日に二～三本はできた。

こうして事業は順調に続けられたが、六カ月を越える冬の間、山を守って越冬することは大変であった。そして大正四年三月には越冬隊が相次いで奇病にかゝり四人がつぎ／＼と倒れ、大正七年にはつゝにこの鉱山も炉の火を消すことになってしまった（長沢　武）

鰤は、めでたい年越魚であるとして広く民衆に貴重がられたことは、今も昔もかわらない。いまに残る江戸時代の古文書の中から、鰤についての当時の様子を探ってみよう。

海をもたない山国の信州にとって、その生活に必要な塩・魚介類などの海産物は、遠く国ざかいを越えて海をもつ他国から移入しなくてはならなかった。そこで、これら海産物は越後・越中・能登などの北陸地方の海岸、はては東海地方・瀬戸内地方にまでわたる地域から幾山河をこえて運ばれたものであった松本平で食用に供せられた海産物は、この中特に越後糸魚川から姫川伝いに糸魚川街道によって運ばれたものがその中心をなしていた従って松本藩では早くからこの街道による諸荷物の運輸の重要性を考えて各種の施策を行なっている。信越国境にある大網村（現北安曇小谷村大網）から松本城下までは非常に遠距離であることと、その間の小谷・四か条地域は毎年豪雪に見まわれて運輸が支障することから、この間に十六箇所の荷物の継ぎ場である荷宿を設け、海産物に限らず各種の荷物は大分部この荷宿を経由してリレー輸送されることに規定されていた。肴荷物については松本に二人の肴問屋を指定し、各地に肴仲買人なども指定してその管理に当らせている。

またこの街道の要衝である千国口留番所（現小谷村千国）では、肴荷物一駄につき銭四十八文程度の運上金と称する関税をかけて藩財政入の一助ともしていた。さらに大網村には荷物取締所を置いて、村役人による荷物の監視をさせたり、糸魚川の海産物商人の中のおもなものを信州問屋として認めるなど、各種の統制を行なってきた。

糸魚川街道のブリ

鰤荷はこのような中を牛の背やボッカ（「歩荷」と書く）と称する荷物人夫の背によってはるばる運ばれてきた。姫川伝いの道といっても洪水や豪雪、特に雪崩による障害を考慮して、街道は上り下りの多い山地をはいまわっているのであるから、馬による運輸は出きなかったようだ。肴荷物はその性質上、継ぎ荷に要する時間の無駄を省くため、通し荷といって途中の荷宿で荷の着けおろしをしなくてよいものとされたが、ただ毎年旧暦十月二十日から十二月一杯は積雪期であるので継ぎ荷にされていた。しかし鰤などは年越魚であるため継ぎ荷にしていると新鮮度がなくなったり、正月に間に合わなかったりすることがおこり、しばしば糸魚川と松本・大町の魚商人の間にいざこざがおこっている。松本平の正月の間に合せるため糸魚川を例年の通りの期日に発した牛方たちが、途中の荷宿で駄賃銭のことから荷宿と争って手間取っていたので、せっかく粋のよい鰤を運んできたのに大町へ到着してみると肉はいたんで食用に出きなかったとか、年越の間に合わなかったということがあったようだ。また、牛方たちは鰤運送の駄賃引き上げを要求したが糸魚川の荷主らの反対にあって要求が入れられず、そのため松本まで運ぶべき鰤荷のこも包みを途中で切り開き、中の鰤を小売りして代金を肴問屋に納めるなどの勝手な振舞をする者もかなりあったようだ。ともかくも、こうして長途を時日をかけて労力をかけて運ばれてきた鰤荷は、目の玉の出るほど高値を呼んだものであり、一般庶民には縁の遠いものであっのだろう。

具義巾

（松川小学校教諭）

博物館ニュース

協議会

山博協議会は十二月十日午後一時から、商工会議所大会議室で開かれた。たまたま市長の要請により山博扇沢分館の建設に指導、助言をするため来市中の自然教育園次長の鶴田総一郎先生も出席してくださって、午後五時の解散に到るまで終始熱心に活潑な話し合いがなされた。

当日は館側から一般経過、扇沢分館の進展ぐあい、ヒマラヤ遠征隊の壮行会のもちかたなどについての経過報告や別記載の寄附受入報告があったのち、三十九年度の事業方針、人件費等を除く総額六百七拾三万五千円の三十九年度予算の素案について協議した。

事業方針では①自然保護活動を進める。②館内外の整備充実、③資料の収集整備、③教育普及活動と住民サービスを強化する。④扇沢分館ならびに動物舎移転建設を促進するなどが基本方針として示され、ライチョウ、カモシカ、コマクサの保護増殖、展示会の回数増、登山教室の開設などが確認された。

また予算については三百三十五万円の附属動物舎の移転建設費、雨もりのひどい本館屋根葺工事費五十万円、教育普及活動費四十八万三千円などが主なもので、他は物価高を見込んで三十八年並の予算であることが説明された。

動物舎の建設では異口同音に早期実現が呼ばれたし、その建設方法についても期別施工の意見も出されて話しあいは発展した。

議題にくみ入られたヒマラヤ遠征壮行会については、提案どうり採決され、一月十一日午後一時大町公民館で市関係、体育関係団体と協力し盛会に開催することになった。

最後に櫛田先生から、針の木自然園と山博扇沢分館建設の話しを聞いた。

ご寄附ありがとうございました

仁科神明宮　全紙写真　八枚　一万円
若一王子神社全紙写真　四枚　六千円相当
仙台市近藤賢治　現金一千円　施設費の一部
大町市古原和美　図書　四百二十円　ヒマラヤの旅
ミヤリサン本舗　ミヤリサン剤　三千円相当

（順不同敬称略）

ヒマラヤ遠征基金募金映画会

「九六四年全日本山岳連盟ヒマラヤ遠征隊（大町山の会所属隊員）基金募金映画会は去る十八日（大町山の会主催・山岳博物館協賛）大町市民会館で開かれ約七〇〇名の人々が参加。諸経費を除いた四万余円が大町山の会北沢会長より、遠征隊隊長古原和美氏に一同の拍手の中に贈られた。

スケッチ

鹿島槍を仰いで夏はハイカーのコースに、又冬は冬山の鹿島槍入りのコースとしての黒沢高原にこのたびスキー場ができ上った。鹿島槍国際スキー場で、二百名収容のロッジリフト二基で12月の23日より営業を開始する

山と博物館　第八巻　第十一号
一九六三年十二月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL（大町）二二一
大町山岳博物館
印刷所　大町市上仲町
信州印刷大町工場